

---

# 忘却

あきくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘却

### 【コード】

N8536B

### 【作者名】

あきくん

### 【あらすじ】

これはSFです。といっても”少し不思議”の略の。思い出した、という話です。

## 忘却

他人の理由なんて知るはずもなく、まして原因なんて考えてわかるものではない。しかしわかっただけはいても気になって仕方がない。そんなことが青年にはあった。

若さか、はたまた何かの病か。単にあれこれ考えてみても何もならないこともわかつている。ただ何か意味があるはずだと、それだけは信じて青年は町に現れる。

何の気なしに町を歩くようになったのはいつのことだろうか。決まった時間に決まった場所。今では普通に毎日歩くようになっていく。そんな意味では中高年の散歩と大して変わらないな、と苦笑さえ覚える。

きつかけは忘れたが、今まで続けて来たことには理由があった。それこそが気になって仕方がないことと直接関係のあることなのだが、そんな自分の理由なんて簡単でそしてくだらないとしか言いようがない。

とある人間を見ること。

青年は今日もいつもどおり歩く。

歩き始めて数分と経ったあたりから青年の拳動が怪しくなる。それは一箇所を注視しても怪しまれないほどの人目かを確認するためだ。そして納得したかのように軽くうなずくと、青年は歩みを遅め、そつと目的の電柱辺りを見る。

少女。そこにいるのは憂いを帯びた表情を見せる一人の少女である。

青年は少女を横目でちらちらと追いつつ、他には何もせずに通り過ぎる。何もできるはずがない。少女を見るといって歩く理由、歩く目的は果たしても気が晴れることはない。なにせそこから先の気になっただけをきくことができないのだから。少女を見ることを

目的として良しとしてしまっている以上、気になっていることを聞くという行為は一步先に踏み出さなければならぬということなのだ。

できるはずがない。ただ気になっていいるというだけで話しかけることなんてできない。そんな権利もまして勇氣もない。青年はきつかけがほしかった。いつの間にか現れ、それから毎日同じ場所に立つ少女に、なぜ、という疑問をぶつけられるほどのきつかけが。

青年は次の日もまた次の日も歩く。その少女に惚れたわけでもないのに、なぜこうも執着するのか。そんなことはわからない。いや、忘れてしまったのか。今ではただ、なぜ少女がそこにいるのかが気になって仕方がない。

そんな普通が永遠に続くのではないかと思えたとき、青年は永遠という言葉に疑問さえ感じた。そしてきつかけは向こうからやってきた。

「あの・・・」

一瞬わからなかったが、少女の瞳は確かに青年を捉えていた。

「ん・・・」

青年はできるだけ自然に、自分の期待を押し込めるように少女のほうを向く。

「なぜ毎日同じように歩いているんですか？」

意外な質問だった。青年が感じていたように、少女も相手のことを異質な気になるものと捉えていたのだ。

「な・・・、なぜ君は毎日同じように立っているの？」

青年には少女の質問に答えられなかった。だから疑問をぶつけたのだった。気になっていたことなのに、それ以上に自分に対して何か釈然としない。

「なぜ・・・。あなたがいたから・・・」

「違う、そうじゃない。君がいたから歩いていただけ違う。なぜおれは毎日同じ時間に歩いていられるんだ？」

青年は少女に問いかける。

「なら、わたしはなんで毎日同じ時間同じ場所に立っ  
ていられるんですか」

少女も何かを感じた。何かとても不思議な違和感を。

「ないんだよ。君とこうやって話をしてる今以外に、ほかには歩いて  
いるだけなんだよ。君にいたいというだけのために歩いている  
という自分しかない。おれは何でいつもここにいるんだ？君は何  
でいつもそこにいるんだ？永遠と思えるほどに」

永遠なんておかしいに決まっている。青年は異質な自分に疑問を  
持った。

「そうだ・・・よ。わたしが立っていたのはあなたを見たかったか  
らだけど、どうして毎日、いいえずっとあそこにいたんだろう。ち  
よっと気になってた・・・」

忘れていた何かが青年と少女によみがえる。それは自分を否定す  
る事によって得られた真実であつた。

二人が感じた永遠に対する些細な引っかけかり。それを感じてしま  
つたことが今までにないことだったのか。そしてさらに二人が話す  
ということが、それも異質であることかのようになにかがおこつたの  
だつた。

「囚われていたんだ・・・」  
すがすがしい気分だつた。

執着から解き放たれた二人は、どこまでも自由にいけるような気  
分だつた。

了

(後書き)

20070419

読んでくださった方に感謝いたします。

この話は別の”散歩”という話の言わば親戚のようなものです。のような、というのは共通点がいかに多くても他人であるということです。少なくともわたしとしては似た雰囲気を持った別物のつもりです。

題名のとおり、忘れていたことも忘れていたという話なのです。気分一新といったところです。

感想を頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8536b/>

---

忘却

2010年10月21日21時57分発行